

## 1. 研究の意義と目的

### (1) 研究の背景

2008年、文部科学省によって、2020年までに30万人の留学生受入れを目指すという方針が打ち出された。その目的の一つは、「高度人材受入れとも連携させながら、国・地域・分野などに留意しつつ、優秀な留学生を戦略的に獲得していく」ことである（「留学生30万人計画」骨子）。平成29年5月1日時点において、267,042人の外国人留学生がおり、なかでも中国からの留学生数が全留学生に占める割合は40.2%となっている（独立行政法人日本学生支援機構 JASSO）。しかし、留学生の数が増加しつつある一方で、留学生の日本社会における課題は依然として解決されていない。

筆者は学部生時代、大学一年から二年までは中国で勉強したが、その時アクティブラーニングという言葉を目にしたことはなかった。授業中発表することやビデオ教材を使うことはあるが、実際学生たちはほとんど受動的に授業を受けていた。その後、大学三年と四年で留学した日本の大学では、アクティブラーニング型授業の一形態であるボランティアとインターンシップ活動が必修の授業として組み込まれており、この二つの授業を取った際、数々の問題点があることがわかった。しかし、実際にこの活動をやってみると、日本人や日本社会を理解する上でもまた日本語を学ぶ上でも大きな手助けになった。

### (2) 研究の目的

そこで、本稿の目的は、中国人留学生が日本に留学して、日本の大学でアクティブラーニングを用いた授業を受けることで、中国人留学生の日本の大学への適応、社会生活への適応、日本人との人間関係構築、ならびに日本語の習得がどう促進されるのかを探究し、アクティブラーニング型授業が外国人留学生にとって有効な教育方法であることを示すことである。

## 2. 先行研究

先行研究については、第一に日本におけるアクティブラーニングに関する研究、第二に中国におけるアクティブラーニングの現状、第三に在日中国人留学生の適応に関する調査を行う。

### (1) 日本におけるアクティブラーニングに関する研究

日本では、1970年代から大学の大衆化とユニバーサル化により、アクティブラーニングが提唱されるようになった。2000年代に入って、国際的には、グローバル化社会と知識基盤社会の影響を受け、加えて日本国内でも学生は大衆化・多様化し、学生の新しい社会への適応能力が必要になった。そして、2012年の質的転換答申（『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』2012年8月28日）の中で、「アクティブラーニング」という用語が施策化された。そして、アクティブラーニングの定義については以下のようにまとめられた。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称である。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力を育む。発見学習、

問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によっても取り入れられる。」

また、溝上慎一（『高等学校におけるアクティブラーニング』2017, pp. 3-4）によれば、アクティブラーニングの定義は

「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のことと言われる。能動的な学習は、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」

\*「認知プロセスとは、知覚・記憶・言語・思考（論理的/批判的/創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決など）といった心的表象としての情報処理プロセスのことである。」（溝上慎一、『高等学校におけるアクティブラーニング』2017, p4）

ということである。

本研究について、アクティブラーニングについていずれの定義を中心として定めるが、留学生の課題に沿って、アクティブラーニング型授業の意味を以下のように改めて定義する。

「教室内で教員の講義を聴き、知識を獲得するという従来の教育スタイルとは異なり、教室内のディスカッション、プレゼンテーション、グループワーク等や教室外のフィールドワーク、地域活動等を通して、教員と学生、学生と学生、社会人と学生のコミュニケーション活動を行うことで学ぶ学習スタイルである。」

そして、アクティブラーニング型授業の技法について、安永（2016）によると、「AL型授業は、多くの場合、グループに依拠した学習法が採用されている。その代表例として、大学教育を中心に注目を集めているのが、PBL 問題解決学習（Problem Based Learning）、プロジェクト学習（Project Based Learning, Group Investigation:GI）、反転授業（Flipped Learning）、TBL（Team Based Learning）、LTD（Learning Through Discussion）、ジグソー学習法（Jigsaw）などである。」また、アクティブラーニング型授業を取り入れる学生の学習活動は個人-集団の活動（池田・館岡 2007；安永 2006）と教室内-教室外活動（Fink 2003）の二つがある。これらの技法やスタイルが留学生の抱える適応や学習にどのように効果的かを検討していた。

## （2）中国におけるアクティブラーニングの現状

中国のアクティブラーニングについては、『文革後中国基礎教育における「主体性」の育成』（李霞 2015）を手がかりに取り組み。ここでは中国教育社会での「主体性」の意味づけと2001年からの「素質教育」、さらには米国的アクティブラーニングの取り込みとその位置付けについて紹介されている。実際、中国では孔子の時代から主体的に学ぶということが推奨され、「素質教育」は確かに戦後の階級闘争奉仕の仕組みの変革を目指したが、現場では米国や日本で推進されているアクティブラーニングの実践は十分に確立されていない。ここでは、中国人留学生が中国での教育課程で、アクティブラーニングの意味を理解していな

いことの背景や手法に慣れていないことが明らかにされた。

### (3) 中国人留学生の適応に関する研究

葛文綺 (1999) の分析によると、中国の留学生は他の国の留学生と比べて、日本の文化や習慣の受け入れ、対人関係、言語面などにおいてより大きなカルチャー・ショックを受けている。ここでは、中国人留学生が日本での生活ならびに勉学への適応においてどのような課題を持っているかを整理した。

以上の資料に基づいて、中国人留学生のもつ特徴 (弱み・強み) をアクティブラーニング型授業の手法やその効果と照らし合わせ、アクティブラーニング型授業が中国人留学生の適応と学習に如何に効果的かを検討した。

## 4. 調査方法・解析方法

先行研究をベースとして、在日中国人留学生を対象としたパイロット調査 (インタビュー調査) を行い、その知見に基づいてアンケート調査表を作成してアンケート調査を行った。アンケート調査表の中には自由記述部分があるので、アクティブラーニング型授業を通して日本社会への適応を深めた人を対象として、またインタビュー調査を行った。

### (1) アンケート調査

#### ①調査概要

- 調査目的 アクティブラーニング型授業は外国人留学生の日本での課題解決に有効か
- 調査内容 現在留学中あるいは卒業した中国人留学生のアクティブラーニング型授業の参加状況とその効果 (参加したことがない人も含む)
- 調査対象 中国語を母国語とする留学生 148 人を対象とした
- 調査時期 2018 年 5 月～6 月
- 調査方法 10 分以内で回答できる Web アンケート

#### ②質問項目の構成

##### (a) 第 1 部－「調査対象者自身のことについて何う」

質問紙の第 1 部は調査対象の基本情報を収集するため、調査対象の性別、年齢、学年、専攻分野、日本語レベル、英語能力、日本の滞在期間、性格特性 (例: 「リーダーシップをとるのが好きだ」、「人見知りだ」) などの質問項目が作られた。

##### (b) 第 2 部－質問紙 A 「アクティブラーニング型授業に参加したことがある人に何う」

第 2 部の質問紙 A は上述した内容のもとで、調査対象はアクティブラーニング型授業に関する理解を踏まえて、どの形のアクティブラーニング型授業に参加したことがあるか、参加したことがあるか、またその評価はどのようなものであるかに関する項目が作られた。

(c) 第2部-質問紙B「アクティブラーニング型授業に参加したことがないが、アクティブラーニング型授業がどのようなものかがイメージできる人に伺う」

第2部の質問紙Bの調査対象はアクティブラーニング型授業に参加したことがないが、アクティブラーニング型授業がどのようなものかがイメージできる人としたので、これらの人がアクティブラーニング型授業をどのように評価するかについて調査した。

### ③分析方法

単純集計、差の検定、多変量解析などの分析方法を用いた。この分析で、アクティブラーニング型授業を高く評価する、あるいは低く評価する人はどのような人か、そしてそれが性別や年齢等と相関がみられるかなどを調べるため、回帰分析を用いて行った。

### ④アプローチ方法

本調査は中国語を母国語とする留学生148人を対象とし、その中では、筆者自らの友人ネットワークと武蔵野学院大学中国人留学生会に依頼し、ネットで回答を求めた。ほかに、明治大学中国人留学生会、上智大学中国人留学生会の中国人留学生、また、一般社団法人日本国際化推進協会(JAPI)の協力も得ていた。データクリーニングの結果、106件の有効回答を得た。

## (2) インタビュー調査

調査目的	アクティブラーニング型授業は外国人留学生にとって有効か
調査対象	アンケート調査から自由記述で興味深い事例を選び、その中からインタビュー調査に同意した者を対象とする
調査項目	アクティブラーニング型授業は外国人留学生にとって具体的にはどのような効果があるか(例えば日本での生活への影響、学校で学習への影響や人間関係への影響)
調査規模	10人
調査時期	2018年7月～8月
調査方法	半構造化インタビュー

## (3) まとめ

インタビュー調査Aには、アンケート調査から自由記述部分の興味深い事例を選び、その中からインタビュー調査に同意した者を対象とする。例えば、アクティブラーニング型授業の課題を感じている人・感じていない人、アクティブラーニング型授業を高く評価される・低く評価される人にインタビューする。また、調査対象の年齢、性別、専攻分野、滞日期間の違いなど、調査対象の多様性を考慮して、インタビュー調査Aの調査対象を10人にする。さらに、インタビュー調査の質問項目は(a)調査対象の個人留学体験談、(b)アクティブラーニング型授業に関する問題点と役に立つところ、(c)日中大学におけるアクティブラーニング型授業の違い、(d)今抱えた課題のどについて質問した。

また、インタビュー調査は半構造化インタビューで行う。その理由としては、大きな項目

のみを設定した質問票を使って、質問の詳細は回答者とのやり取りの中で臨機応変に項目を設定し、随時聞き取ることになる。調査対象が有する情報の特性を見極めて、情報の質が高い部分を深く掘り下げていきたいと考える。

## 5. 結論

上記の方法で得られた結果を分析し、アクティブラーニングを授業内に導入すると、外国人留学生と日本人学生両方にとって、非常に有意義であると予想される。外国人留学生にとっての具体的なメリットについては

- (1) 日本語能力が向上する
- (2) 主に日本人との人間関係の構築の機会が増える
- (3) 日本人とのコミュニケーションスキルが高くなる
- (4) 日本文化についての理解が深まる
- (5) 学んだ知識を応用する機会が増える
- (6) 日本社会への適応能力が向上する

等という点があると判明した。